

生は、祖母にかけける言葉を「よっ！」と一言で表現した。残念ながら、教師はA生の発言に対して『さみしいなあ、「よっ！」だけか。』で終わってしまい、A生の「よっ！」という一言に込めた思いをさらに深く聞く切り返しや問い返しができなかった。授業研究会では、たった一言の言葉であったが、A生にとってもクラス全員にとっても、本時のねらいにより迫るとても意味をもった言葉であったことが確認できた。

- ・最後に『心のノート』を朗読して授業を終わりにしたことは、大変良かった。また、当初は紹介するだけのつもりで配布した、今年度全国中学校人権作文コンテスト長野県大会で最優秀賞を得た木曾福島中学校の永井雪乃さんの作文を授業時間が終了していたにもかかわらずじっと読んでいる生徒たちの姿が印象に残ることとなった。中には、涙を流して読んでいる生徒もあった。

(2) この事例から明らかになったこと

- ・今回の資料のように文章が長いものは、事前に資料を読むことだけを扱っておくことは有効である。道徳の授業は、1時間があくまで基本ではあるが、事前の短学活などを活用して資料だけを読んでおくこと、また、生徒が感じたことなどを事前に把握しておくことは、より深くねらいに迫る意味でも必要である。
- ・指導者の栄中学校の畠山信重校長先生からは、資料の読み方について、「登場人物の“行為”に着目すると良い。」と教えていただいた。本時のように登場人物の「心情」を考えるような場合でも、資料分析をしたり中心発問を考えたりする際に、「行為」を抜き出して考えていくことが大切であった。
- ・生徒の発言や学習カードに記入した言葉の裏側にある思いを事前に把握したり、生徒の実態をとらえたりする際には、「～のような生徒だから、～のような価値や資料を」と考えるのではなく、「内容項目から見た生徒の実態把握」をすることの大切さが確認できた。また、実際の授業の際には、切り返しや問い返しによって、生徒の思いを級友に広めていくことで、本時でねらう価値により深く迫ることになる。特に今回話題になったA生のような一言で表現された言葉などは、実際にその場でやらせてみることも有効であるというご指導をいただいた。
- ・A生にとって本時でねらう価値への思いがより深くなったのは、「ののしかったことが残忍だと思った。罪悪感もあった。」というB生の発言からであったと畠山先生からご指導をいただいた。級友の発言から、それぞれの生徒の思いがより深まることを、生徒の具体的な姿から教えていただいた。
- ・今回は原作資料の最後の部分の「僕」の言葉を隠し、「どんな言葉が入るだろうか。」と考える場面を設定した。「隠したものは、最後まで隠し通さなければならない。」ということを変更確認しあうことができた。
- ・推進委員全員で、授業構想や中心発問、板書計画、学習カードの形態などについて話し合い、今回の授業を創りあげることができたことは、大変有意義であった。

4 来年度への課題

- ・資料提示の工夫や中心発問のあり方、『心のノート』の効果的な活用方法については、引き続き研究を深めていきたい。
- ・生徒の思いを引き出したり級友に広めたりするための切り返しや問い返しの発問についても、予想される生徒の発言などからより具体的に考えていくようにしていきたい。
- ・「内容項目から見た生徒の実態把握」についても大切に考えていきたい。
- ・一昨年度から隔年で「道徳」と「特別活動」を行っていくこととなったが、来年度は、長野県の道徳学会の上高井大会が予定されているので、今年度と来年度と2年間連続で「道徳」を中心とした研究をしていきたい。